

DXCC 道楽 前編

JH3AEF 東條 純一

東大阪市

道楽 (前篇)

趣味というか、道楽というか、とにかく人生の何%と勘定できる位の長大な時間を費やし、莫大な資金をつぎ込んで、WIFEには、やんやと愚痴られながら、私は今、ようやくHAMの世界で初期の目的の一つを完遂しつつある。

何の資産が貯まったわけでもない。世の中から喝采を受けたわけでもない。世の中では少数派のアマチュア無線の世界の、その中でもまた1グループであるDXCC hunterの集まりで、一つの決まりごとを完成させたまでのことである。結果として、毎度のごとく故JA3ARY 大門OMにひにくられてきたと云い、金にもならないQSL Cardがたまっただけである。

それでも本人は、いたって爽快で、充足感に満たされている。なにかしら自信のような、プライドのような快感にも浸っている。片方では何がDXCCや、あほらしい、オモチャみたいなことしよって、と一鋭い視線も感じないではないのだが。

まあいいか、DXCCを肴に飲み、食い、何時間でも楽しく喋れる仲間が沢山いるのだから。時には世界中からそんな仲間が集う楽しいMeetingも開催され、実に気楽に参加できるのだから。

これ即ちDOURAKUといづくいのものなのかも。

そろそろ本題に入るとしよう。HAMにとってアンテナは車の両輪のような関係であろうか。片一方でも無ければ何も始まらない。時には名わき役にもなるが、時にはもう一寸と小言の一つも言いたくなる。ANTはまるで女房の存在みたいなものかも...。大きく違うのは、嫌になったらいつでも取り換えがきくという点か。大枚をはたけばそれなりに立派なものくるし、財政ひっ迫時にはそれなりに質素なものでも通用する。和製にあきればWからでもEUからでも素材に事欠くこともない。

話は初めからいささか脱線ぎみである。少し修正しよう。RIG然り、アンテナ然り、タワー然り、もはやアマチュア無線技師として技術に腕をふるうことの少なくなりました。技師ではあるが、まだ何と無く割合簡単に技師まがいのことのできるのにはアンテナの分野だろうか。

といった具合で今回は、私のDx HuntingとANTとSSNの係わりについてお話を進めさせていただくことにする。

私にとってアンテナは、いや屋上に横たわるアンテナの残骸は、HAMライフの一こま一こまを象徴するランドマークのような存在である。それゆえ何となく愛着があり捨てがたく、エレメント、ブーム、マストへのクランプ、その他の細かいパーツまで、アンテナごとにとまどめて横たえている。けっして捨ててしまわないのは私流なのか、それとも、初期のころのアンテナハンドブックを原典に、少なくなった竹ざおを探し、テレビのアンテナをつくる町工場から無理を言ってせしめてきたアルヨパイプを材料に、八木アンテナやHB9CV、クワッド、さらにはスケルトンスロットとかいうハイカラなアンテナを作ったときの苦勞がしみついて、そのような行動をとらせているのかも知れない。

たとえ何年も、いや中には十数年もの永きにわたり、空中で私のHAMライフに貢献してくれたとはいえ、アンテナなんていうものはそうたやすくボロボロになってしまうのではない。いや、そうならないように造られているのがアンテナなのだ。エレメントにしても、ブームにしても、ましてやトランプやローディングコイル、マストクランプなどは、例えそれが錆びついていても、若き日の私なら喉から手が出そうなくらい欲しかったパーツばかりである。捨ててたまるか。といった感覚でローカルの若い連中に「古いアンテナあるよ、あげるよ」と情報を流してみた。

予想に反し手をあげた人はゼロにちかい。皆お金持ちなのか、HFのアンテナを上げるスペースに問題があるのか、HF人口が少なくなったのか、全てがその理由なのかも知れないが、全く予想外の結果であった。

ちなみに今こころがっているものはAV12AVQ (トライバンドバーチカル)、TA33 (定番のトライバンドエレ八木、この間QSY)、TH6DXX (知る人ぞ知るブレDXサー御用達の6エレトライバンド)、205BAS (少々マニアックな14の5エレフルサイズ八木)、CL204A (プレマニアックな14の4エレフルサイズ八木)、218A (一寸毛色の変った21/28の4エレデュオバンド)、AFA30 (10メガ専用の2エレフェイズドアラレービーム)、CD78L (街中でこれを振り回すのはさすがに私も気がひけた3.5/3.8メガ用短縮ダイポール、嫁入り話あり)、ローテーター一台といったところである。

ついでにタワーについて。当時タワーを持ち、その上にHFの八木アンテナをのせている局などなかなかお目にかかることはなかった。私などはインバーテッドV、後にパーティカルのトライバンドがやっどであった。それでも「東條君、ラッカダイブが出ているよ、などと突然電話して下さったりした故JA3CV笹岡MDのお宅には、早くからタワーとHFの八木アンテナがあがっていた。車で20分ほどのローカルだったので、夜な夜なその構造を探りに出向いたものだった。その結果、私のところにもタワーもどきが建つ結果となった。現在の建物以前、木造二階建て診療所の屋上には物干しがあった。ローカルの町工場のオーナーであり、かつHAMの故JH3BKS氏から知識を得ながら、L型鋼、C型鋼を組みあげて5mほどのタワーをおたてた。私なりに気に入った挙句、もう一本3m程のも組み上げてTwin Towerと粋がった。当時はタワーを越す建物も無く、てっぺんからは360度の視界が開けた。奥様がおめでたで通院に付き添って来ていた(故?) DJ5RT Fredは、躊躇もなくタワーに登ってDJはあっちなどと話がはずんだ。自前のタワーではあったがTA33、次にCL33とのコンビでかなりの実績が上がっていた。開局して数年が経過し、がきの頃からの夢であった海外QSO、DXCC狙いが現実のものとなったのはこの頃であった。



写真 1 旧建物上に建てたツインタワー。HAM活動の方向性が決まらず、さながらANTの品評会

KR6の沖縄米軍の軍人が唸るように強力な信号でPhonepatchを通じWの家族と長時間QSOするのを、声をひそめてWatchしたのをはつきりと記憶する。Cycle20(1968 1972)も最盛期だったのだろうか、とにかく馬鹿強い信号が多かった。図 1

ぼちぼち国産やW製のタワーが市場に流通しだした1975年、私の木造診療所は新しく鉄筋二階建てとなり、屋上にはタワーの基礎も施された。建ったのは米TriX社のLM470D、全伸22mの電動4段のクランクアップタワーである。タワーは新しいドボツケメッキの色が鈍くシルバーに光り、まばゆいくらいであったが、新築の真っ白な建物壁とマッチして、町工場街ではひときわ目をひいた。ANTは使ってきたCL33がそのままのった。

写真2

Cycle21(1979 1983)の到来をひかえ、せっかくTowerも建てたのだからと、次にのせたのはブーム長7m、最長エレメント9m、6エレメントのTH6DXX。SSN200超えのReportもでるCycle21の最盛期には、私のDX CC Huntingは快調に進んでいた。中でもTH6DXXの10mバンドは5エレとして働き、サイクルの最盛期ともあいまってFirst call first returnの快感も幾度となく味わわせてくれた。Cycleの最盛期を過ぎる頃は、私の獲得Country数は200の大台にのっていた。その後もTH6DXXは太陽黒点の如何を問わず、私の運用に大いにこたえてくれた。

写真3

図 2 図 3

しかし、タワーを建てる局、八木アンテナを設備する局も多くなり、何より先局数が急速に増加し、何でもかでもいただきとはゆかない状態になりつつあった。さらに私のDX huntingも通常のOver sea局では飽き足りない領域に入り、

狙うは珍局、或いは、数年に一度のPedi局が対象となり始めていた。確実に狙った局をとにかく陥とすには、通例Pedi局が最初に運用を始める20m Bandを確実に射止めるのが鉄則である。私にもその為の設備が必要となってきた。そこで採用したのが20m Band full sizeの5エレの八木アンテナHygain 205BASであった。初めて11m超えのエレメントと10m超えのブームを組み上げた時には、実際このアンテナをタワーの上に揚げられるのか大いに心配であった。何週間もの時間を費やし何とか自分の手でアンテナをタワーの上に固定出来た時には、してやったりの感があった。更にその上に15m、10m 4エレ八木(Create 218A)をのせたのだから我ながら「ちとやりすぎかな」...

写真4

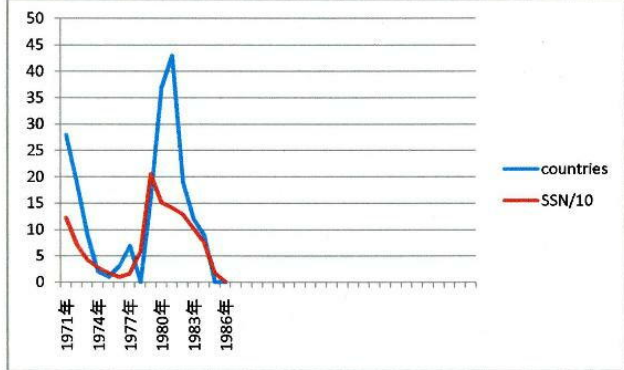


図 2 サイクル20 21における年別カントリー獲得数。黒点活動が活発でなければカントリーもかせげない

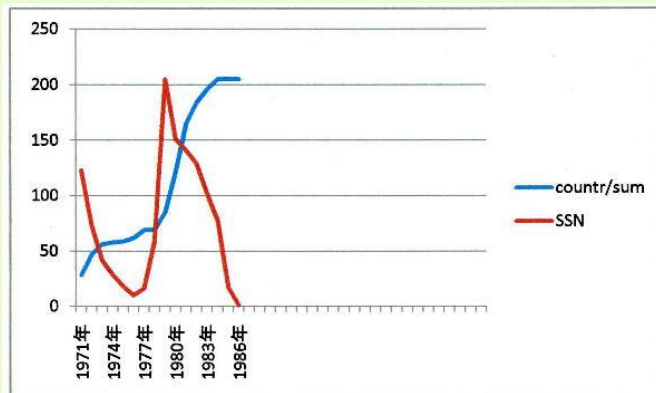


図 3 サイクル 20 21におけるカントリー獲得総数の推移

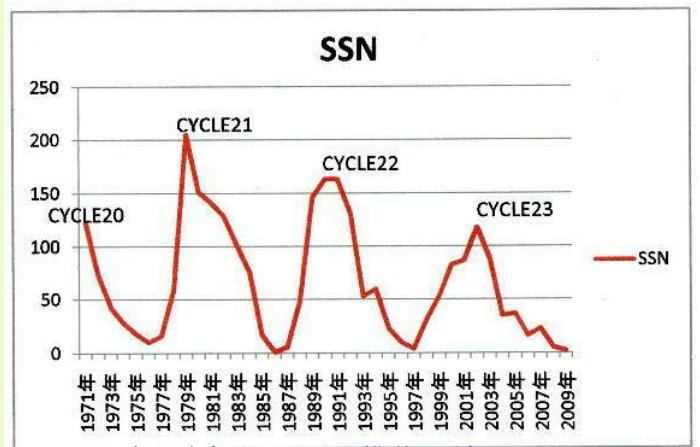


図 1 過去40余年間のSSNの推移。近年はサイクルを重ねるごとに活動の低下傾向がみられる。左端からサイクル20, 21, 22, 23 縦軸に黒点数をとる



写真 2 新設のLM470DタワーとそれによるCL33。脇に12AVQバーチカル



写真 3 Hy-gain TH6DXX

タワーを全伸すると地上高30m、自前のC型鋼製のタワー時代からすれば隔世の感があり さすがの5el full size 八木もこの高さに収まれば心地よい大きさに映った。そして、そして、打ち出す信号の威力は敵何するものぞの感があり Countryは増やせるは、パイルはぶち抜くは、最も充実した一時期であった。ただ218A、15/ 10mの4エレは、それまで使用してきたTH6DXXの10mの威力があまりにも強力であったため、かなりの実力低下となってしまった。ただ空の状態が今よりはよほど良かったのであろう 根気でアンテナの弱点をカバーすることの出来る時代であったようにも思える。

次に来たCycle22(1989 1992)はSNNが160超えの年が2年、その前後に130超えの年が2年とDXHunterには願っても無い好条件の年回りであった。Cycle22が陰りを見せ始めた1994年にはCountry数はいよいよ300をこえていた。

図4 図5

HF帯でのDX通信は太陽の黒点周期に左右される。また、その黒点数は約11年の周期で増減し、黒点数が多い時期ほどHF、その中でも周波数の高い部分での通信が容易、確実に言うことが出来ることは、誰しもが知るところである。しかし、私がいま、自分のDX Huntingの歩みを後方視的に見たとき、ごく当たり前のようによく言われてきたことが、これほどまでに強い因果関係で結ばれていたとは想像だにできなかったことで、今更ながら人と自然のつながりの深さに感動させられた。局の運用にも力がいり、タワーは上げっぱなしになることが多かったが、まわりは町工場であったり空き地であったりで、何年もの間、まわりの目を気にすることも無くハムライフを楽しむことが出来た。しかし、時代の波は大きな変換期を迎え、散在していた町工場は次々と郊外に移転し、跡地には、こともあろうに高層マンションが建つ時代に突入していった。そしていつのまにか、30mのタワーたりとて安心していられた状態ではなくなっていたのだ。

設置当初トボツケメッキのシルバーに輝いていたタワーも、大阪の街中のスモッグと粉塵にさらされ続けるうちに、メッキが落ち、特に日陰になる北西面はすっかりどす黒い錆色に変化していた。建設時間与した業者もタワー事業から撤退し、メンテナンスもままならぬまま数年が過ぎていった。上げ下ろしをコントロールするワイヤーはステンレス製だから大丈夫とは聞いてはいたが、台風の時ぐらいしか降るさずに上げっぱなししてきたタワーは、足元について引き降ろすすにも不安が募るほどの永い年月、25 6年が経っていた。

写真5

ハムショップを通じて打診するタワー関連業者も、取りあえずはやって来るものの、一向に具体的な話には至らずじまいであてにならなかった。とある年の春、関ハム(関西ハムフェスティバル)の会場に関東のアンテナ業者(FTI)のブースを見つけ、それとなく日頃の悩みを話してみた。基礎は既存の鉄筋の建物であること、永らく使用してきた470Dが現用中であり、基台は建物自体に施されていること等が主たるところであった。と、以外にもFTI社のある機種が今の基台にそっくり取り付け可能という回答であった。何？うちはWの470Dやで！あまりの即答に一瞬危うさを感じ(この部分はFTI社にはまことに失礼、後に絶対の信頼に変化)、その場はそそくさと退散した。その後も仔々細々にわたるやりとりと検討の結果、あらゆる不安材料は払拭され、遂に翌2002年5月FTI社製FDX472J全伸22m4段電動クランクアップタワーが従来の基台の上におさまった。C型鋼のツインタワーから数えて実に3代目のタワーである。

写真6



写真5 錆び色も激しい旧LM470Dタワー



写真4 Hy-gain 205BASとCreate 218A

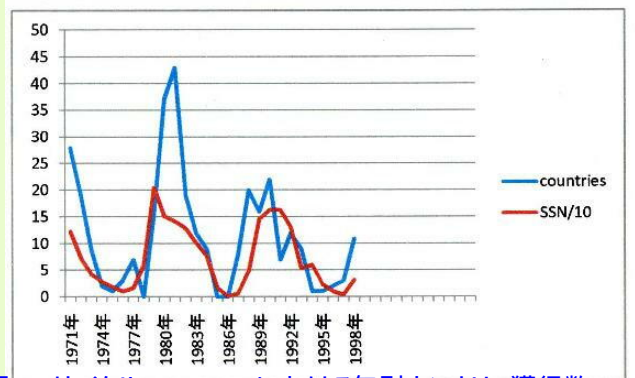


図4 サイクル20 21 22における年別カントリー獲得数

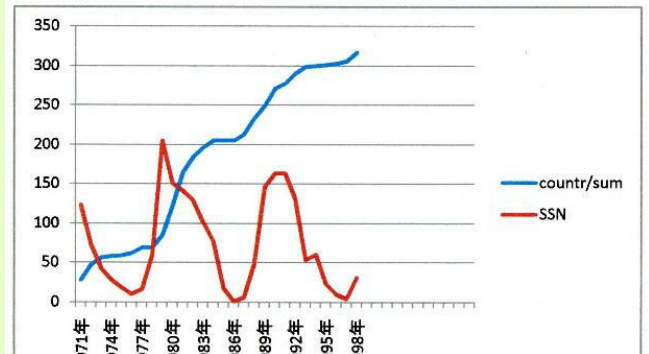


図5 サイクル20 21 22におけるカントリー獲得総数の推移

写真6 タワーの入れ替え、ANTの載せ替え全てが一日で終了



あれだけ労力と時間を費やしてやっとの思いであげた20m5エレFullsizeの八木や、更にその上にのる10/15mの4エレ八木の載せ替えなど、FTI社の熟練の技師連の前にはいとも簡単な作業のように映った。Towerの入れ替えなど数日を要する難工事かと思いきや、たった1日で全作業が完了してしまったのにはおたまたまげた。何より、彼らの仕事に対する誠実な姿勢と、確実な仕事ぶりにはすっかり魅せられた。以来、私はあれほどおそれていたTowerのメンテも、ANTの載せ替えも、きまって彼らにお願いすることになっている。

ただ、ANTの組み上げや調整は必ず自分で納得のいくまで試行錯誤し、アマチュア無線技師の面目を保つ努力を忘れないように心掛けているつもりである。

FTI社はいまやアマ無線界では知らぬ人のないほど有名になったTower, ANTの会社であるが、会社が東京八王子市にあるため、関西をはじめ地方からは距離感があり、何かと不安を抱く人がいても不思議ではない。しかし、彼らの仕事に対する誠実さと仕事の確実さは実に信頼に足るものがあり、このことは関東の業者という距離感からくる不安をはるかにしのぐ重要なポイントといえよう。私は常に、少し時間的余裕をもって連絡を入れるよう心がけている。さて、あまり印象にないのだが、DXCC何Countryとの表現がEntityという表現に変更になったのはこの頃からだろうか。List上の名前とCountry、Entityの語意を正確に考えれば、確かにEntityと呼ばれて然るべきと感じる。



写真7 壁を飾る楯とステッカー類

ところで、私のシャックのMain Rigの上方には今も古ぼけた紙切れが張られている。用の終わったお御籤が植木にくくりつけられ、よれよれになっているように。書かれた文字を読むのも苦勞なくらい古びている。しかし、私にとってこの紙切れこそ毎日毎日にらみ続けた大切なものである。いや、ほんの数か月前までは私を縛り付けていた大切な紙切れだったのだ。1998年も終盤にちかいか頃だったと思う。残っていた15 EntitiesのPrefixとJAからの方位をメモった覚書である。そのため用事の済んだEntityには力強く斜線がひかれている。斜線だけはいつれも黒々と判別できる。このあいだ、最後の一つKP5が真新しい斜線で消されたのだった。

私を悩ませた15のEntitiesとは以下のようなものである。人によっては、コソッと出会うと何ほどのこともなく終わったEntityも少なくなろう。しかし、TNとSV/AはEUのさるDX Netに来る日も来る日もShow Upし、私はもてもしないJA局ですという引け目を耳いっぱいと感じながら、目的の局のOn Airを待ち、苦勞の末にやっとの機会を得てQSOにこぎつけた労作中の労作であった。考えようによっては抜けないDPイルを必死になって呼ぶ方がどれだけ気分が楽かとも感じられる労作であった。年月はQSOを果たした日付である。

CY9(St. Paul Isl, 1998)	8R(Guyana, 1999- 2)
SV/ A(Mount Athos, 1999- 3)	TN(Congo, 1999- 3)
PY0S(St. Peter&St. Paul Archipelago, 1999- 3)	3C0(Annobon Isl, 1999- 9)
5A(Libya, 1999- 10)	VP8so(South Orkney Isl, 2001- 12)
TI9(Cocos Isl, 2002- 2)	P5(North Korea, 2002- 5)
VK0M(Macquarie Isl, 2002- 6)	VP8sg(South Georgia Isl, 2002- 10)
CY0(Sable Isl, 2002- 11)	VU4(Andaman&Nicobar Isl, 2004- 12)
KP5(Desecheo Isl, 2009- 2)	

TN, 5A, P5, VUa/n,は政治上の理由により、SV/Aは宗教の戒律により、KP5は環境保護上の理由により、他は絶海の孤島であるがゆえに、というところがQSOが困難な原因であったと考える。8Rはハム人口も少ないのであろうが、私とは相性が悪かったのかもしれない。

2002年という年はCycle23(1999-2003)の最盛期にあたる年でもあった。しかしSSNは従来のCycleほど活発ではなく期待を大きく下回ってしまった。一方、DX界は非常に活気があり、P5北朝鮮、CY0、TI9、VK0M、VP8GなどActivityの低いEntityからのPediが目白押しに実施され、その上3つのEntityが新しくDXCCのListに加わったりして我々Hunterを喜ばせた。私も首尾よくこれらのEntityをいただき、ついにDXCC HONOR ROLL memberの一員に加わることができた。DX huntingを志してから32年の歳月がたっていた。Shackを飾る定番の楯は当然のことながらお金を出して送られてくるものであるが、「おめでとう、あなたを今日からHRメンバーの一人としてお迎えします。」などと大見出しで書かれた印刷物が送られてくるなどARRLの、いや、アメリカ人のかも? Entertain精神の豊かさに感心しながらも決して悪い気持ちはしなかった。

写真7

HR入りをはたし、Dx huntingもVUa/n、KP5を残すのみとなり、いつ実現するわからないPediを待つ間にと、同じARRLの出す5 BAND DXCCに挑戦することにした。5 BANDとはもちろん3.5、7、14、21、28の各バンド、いずれのバンドでも100 entities以上のQSLが求められている。上の3バンドはすでに100以上あるとして、7MHzはBANDも開けやすく、すでによくばくかの蓄えもあったが、3.5/3.7MHzはかなりの難関のように思えた。まず40mから始めたのは、HR入りしてすぐの2002年9月であった。Towerにある20mのビームは何時あるかもわからないBig pediのためにどうしてもおいておきたかった。仕方がない、TowerにDPをはり、DX局の多い7MHz bandの下の方で、日ごとBand new探しに没頭した。Watchを続ければそれなりの成果はあがっていくものの、DPではPileには全くの無力、敗北感に泣く日が続いた。

そんなある日、JA3LDH高井先生が来局された。私は数年前、OMのSHACKにすでにHRと5 BandDXCCの楯がしっかり飾られているのを見せてもらっていた。彼はANTを見て開口一番「飛びそうなANTやなあ」。勿論である。自慢の20m5エレFullsizeですもの。しかし、今、5 Band DXCC狙いの40m DPで悪戦苦闘している話になった。やっぱり40mもビームANTやでというところに話は落ち着いた。年が明けて2003年4月、後ろ髪を引かれる思いで20m5エレを降ろし、クイエー1714X-3というこれまたマニアックな5エレ八木があがった。ブーム長は先のANTと変わらないものの、エレメント長は長いもので何と14.4mと、先のANTを遥かにしのぐ長さである。40mは3エレとして動くが14MHz、21MHzは4エレとなり、14の5エレに比べるとかなりのゲイン不足になった。その上28MHzもWARC Bandも無い。しかし

自分の今の目的、7MHzのDXCCを大台にのせるにはこの選択が最適と考えた。突然残りのVUa&nやKP5のPediが始まって何とか対応のとれるANTだと考えるしかなかった。

さらにその次も考えて、マストのてっぺんには3.5 / 3.7MHz用の短縮水平DP、CD78を八木のブームに平行にのせた。長さは17m、一見、八木の上にヤジロベエが乗っている感じである。

写真 8

予想どう7MH zの3エレは望みどうのPowerを与えてくれた。運用は常にBear footでありながら狙ったDx局からは必ずReturnがあり、年末には早くも100の大台を超え、2004年正月には80 / 75mのWatchを始めるに至った。

今やANTは馬鹿でかいTreeになっている。かつての町工場街も今ではマンションや戸建て住宅の密集する住宅街に変わっていた。もはや常時Towerを揚げっぱなししておく訳にはいなくなっていた。80 / 75mのDx huntingは10月から3月の間のみのOpenであり、しかもJAからは早朝04:00J 07:00と、年末のほんの一時期のみ夕刻にOpenの時間があるという厳しい条件である。2004年の正月からは早朝4時過ぎにTowerをFull UpしてWatchに入り、Condxの良い日には中東からEU、そしてBandがしずまる直前の07:00J前後には、運が良ければ南米、北米のLPが狙えるという生活が始まった。07:00Jを過ぎると店じまい、Towerを降ろすことも大切な日課となった。80 / 75mを得意とするLocal局からは、大阪の街中で75mのDXing ? どの位のNoise Level ? ANTはどの位の高さに揚げられるの? Powerは? と、どれ一つ満足な答えにならないみじめな環境にいることを痛感させられた。さらに私のQTH周辺には、丁度75m BandのDx局の多い周波数帯に覆いかぶさるように突然に表れるBCbandの混変調があり、折角のDx局にCallも出来ないことがしばしばだった。突然出だした3の珍局? に当初は常連各局も怪訝な面持ちであったが、旧知のLocal局のさげすまない計らいで、あいつは何が何でもDxccを狙っているやつとの認識が浸透し、いつしか、違和感なくこのBandで活動できるようになり、のちには多大の協力をいただくことも少なくなかった。あまりのActiveさと、遠慮無いCallに、時にはDxからひやかしゃ、助っ人が飛び出すこともあった。参入当初どうなることかと思われた80 / 75のDXCCも、ちょうど2年が経過する2006年1月には100 Entity超えの大台にのり、Band DXCCは完成した。

写真 7

この間、2004年12月、DXCCの残り2 Esのうちの1つ、VU4 Andaman & Nicobar Isl.のDX peditionがおこなわれた。VUはVU本土の他に、Andaman & Niobar Isl.とLaccadives (Lakshadweep)Isl.の2つのEntitiesをもつ。インド国内の政治情勢もありPediは非常に永らく実施されてこなかった。確か1989年のLaccadive以来と思われる。それ故に需要も多く激しいPileになることは実施以前からささやかれていた。SSNの低迷期でもあったが、幸いJAからは比較的近距离で条件は悪くなかった。私も開始当日にContactを果たすことができた。大きな番狂わせが起こったのは、Pediが始まって間もなく、無名のAndaman & Nicobar Isl.の名を一日にして全世界の人々に知らせた大地震とあの大地震が起こったことであつた。Pediは直ちに非常通信に切り替わり、インド政府の救援活動に大きく貢献した。このことが同国内でアマ無線の社会的地位の獲得に大きな力となり、その活動はますます盛んになってきている。

VU a / n とのContactを果たしたことで、私のDXCC huntingはKP5を残すのみとなった。

図 6 図 7

KP5 Desecheo Islとはカリブ海のプエルトリコの西20kmに位置する入島禁止の無人島である。絶海の孤島でもなくどちらかといえば誰でも、何時でもちよいと渡れそうな位置にあり、しかも米領である。何がそのように永らくHAMの、いや、人の上陸を拒絶し続けているのか。今どき、一番声の大きい環境保護団体である野生生物、魚類保護の組織が、この島の管理を米政府から仰せつかっているからだそぞ。私は1989年3月に行われたPediの際Contactは果たしたつもりであった。しかし、QSLの発行者はNOT ON THE LOGとのことで、ついでQSL CARD

の発行は受けられずじまいに終わっている。一度あることは二度あるである。用心、用心。

写真 8 Create 714X-3と上にあるCD78のヤジロベエ

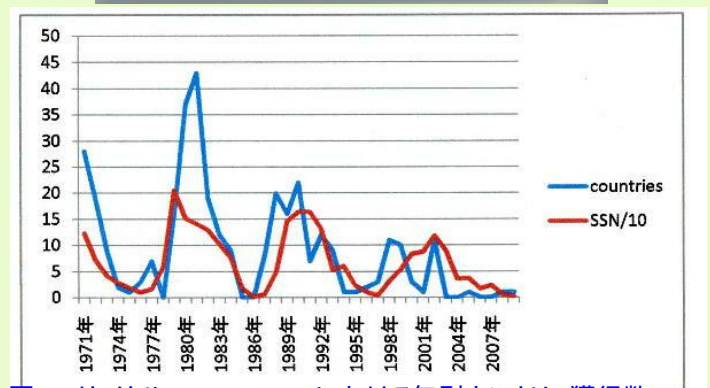


図 6 サイクル 20 21 22 23 における年別カントリー獲得数 図 6

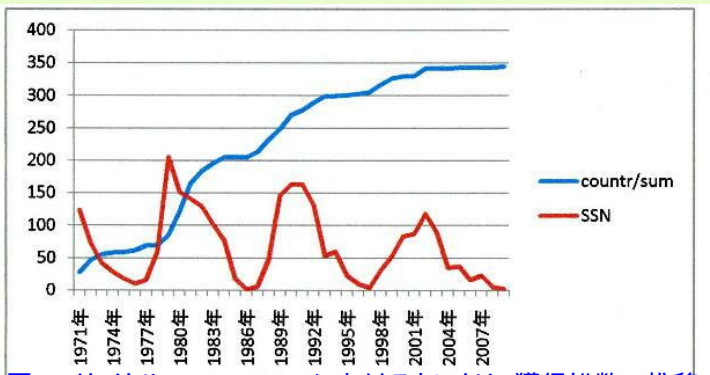


図 7 サイクル 20 21 22 23 におけるカントリー獲得総数の推移 図 7

2005年11月には関西では初めてとなるWorld WideのDx Convention, アジアパシフィックDxConv. (APDXC)が私のQTHからすぐ近くの会場で開催された。大阪国際交流会館(よく学会などでも利用される)ラジオクラブ、ICOMの共催によるものである。海外からの参加者の中には超大物のON4UN (Low Band DXingの大家で同名の著書がある。) K4UEE (非常にActiveなPeditiorer、最近では3YやKP5のPediを仕切る) VU4RBI (VU a/nで久方ぶりのPediを実現させたが、地震と津波のほうで一躍有名になってしまった 筈など多数の面々が参加した。

K4UEEにはどうしても情報として聞いておきたいことがあった。講演の合間に彼の前に歩みよるといかに人も懐っこく「Hi, Bob」と自分の顔を自分で指差した。すらっと背が高く、スリムなGentlemanであった。

「KP5の情報教えてーな。おれ、こいつだけが残ってんねん」 Great! やる、やる、もうきやるよ」

「もうきって何時ですんねん?」 「そらちょっとわからんわー」

それから数週間、KP5に向かってるやつがいる、との情報が伝わってきた。そんなに早くご利益があったんやろうか。情報に従ってWatchに入る。情報が少ないせい、平日の早朝のためか、呼ぶものはわずかである。それにしても信号が弱すぎる。おまけに雨が降り出した。私のところでは雨が強くなると電柱から出るNoiseが雨に比例して強くなる。どうもJAをエリア指定しているようだ。何とかなるかも、Watchを続けるうちに大雨に。Noiseも雨だれに同期したようにバリ、バリ、バリ、翌朝も同じ時間帯にWatchをするが、何の信号も聴こえない。とKP5の連中はCoast Guardに捕まって離島したとか、との情報が。これはBobの言っていた「もうきな」のPediではなかったらしい。

KP5の情報収集には抜かりがないようにしながら、5 Band DXCCの次、2006年2月からは10.1MHzのDXCC狙いにことしかかった。40mの時と同様、まずはDPで始めた。このBandはおおむねBand condxが安定で、混信も少なく、Mannerも上々、SSNの低迷期にもかかわらず、気持ちのよいQSOを楽しめた。暖かくなったらと考えていたピームANTとの入れ替えは少し遅れて7月になった。Tower上のマストのてっぺんにあるヤジロベ-CD78にかわり、10MHzのAFA30 2エレのフェイズドアレーピームANTがのった。このBandもピームANTになれば何処の局であれBear footで充分で、翌2007年11月までに100E オーバーを達成した。

写真 9

次は18MHz、その先は24MHz Bandと進む予定ではあるが、その場合のANTをどうするかは悩ましい問題であった。WARC Band 専用のMono banderやDuo,Tri banderもある。さらに多BandのピームANTもある。

色々思案していたところ、今、にわかに話題になりつつあるANTのことをLocal 局から耳にした。Stepp IR Antである。簡単には八木ANTのエレメント長を内蔵のコンピューターが瞬時に計算し、計算された結果にもとづいて内蔵のStepp motorが直ちにエレメントを繰り出すという優れものである。各エレメントが全て同時に作動し、Band幅内全ての周波数に対応する。上のBand edge、下のedge、いずれのPointでもMatchingが完璧にとれていているから素晴らしい。多くのHamが少なからず同様の発想はもってきたが、なかなか現実のものにならなかった逸品とみてとびついた。私が採用したのは最も汎用されているタイプの3エレ八木である。全てのBandでFull sizeとして働き、14MHzから上は50MHzまで全てに対応する。ちなみに商品名のStepp IR とは、エレメントを繰り出すStepp motorから、IRはメーカーの社長のCall sign K7IRにちなんでつけられた名前と拝察する。使ってみての感想は、出る周波数全てでSWR 1:1であるからInterferenceの心配もなく気が持がよい。エレメント長の調整にも時間がかからず、大きな音も出ない。使い始めて1年そこそこではあるが、今のところ故障もなく、私のNeedsに充分答えてくれている。

このANTを714Xの上ののせてみた。714Xは7、14、21MHzのTri banderであるため、両ANTのBoomを同方向にすると、同一Bandでは干渉が起こり、両者ともMismatchの状態に陥ってしまった。この障害を防ぐため、Boomの方向を90度ずらして干渉を防いでいる。これら二つのANTの間には重複するBandができることになってしまったが、私のHam lifeの変遷上、一時的には仕方のないことと考えている。

写真 10 写真 11

2007年12月、毎度のごとくDPで始めた18MHzは、2008年7月のStepp IRの導入により急速に結果を延ばし11月には100Eの大台にのせた。

写真 9 714X-3の上にはCreateAFA30
がのり ヤジロベ-は少し下へ



写真 10 梱包を解いたStepp IR ANT 梱包ケースの左側にエレメント長を調整するステップモーターとそのハウジングがみえる。モーターは各エレメントの基部にすわる

写真11 714X-3 の上にのったStepp IR 3エレANT..
ブーム方向を90度ずらしている



引き続き24MHzに進んでみたものの、SSN 0の日が大部分の今日では、およそDX局らしき信号が聞かれず、SSNの上昇を待つしかない状態である。

そうしているうちにも、2006年7月にはEUのモンテネグロが独立国家として誕生し、2008年10月にはカリブ海に浮かぶSt. MartinからSt. Bartherony Isl.が分離され新Entityとなった。いずれもContactは果たしたが、カリブのSt. Bartherony TO5DXとのQSOには難儀した。とにかくこのSSN低迷期でのカリブとのContactは、相手局がよほどしっかりした電波を出してくれなければ、まともには聞かえてこないのだから。このSSNの状況では、近くおこなわれるというKP5のPediは先が思いやられるというものだ。しかし、その時は確実に近づきつつあった。